生涯大学「海鳴学園」大学院
ふるさと研究発表会

●とき　**平成27年11月12日（木）**
午前9時30分～

●ところ　**湖西市老人福祉センター集会室**

《研究発表会次第》

1　開　　会
2　学長あいさつ
3　来賓あいさつ
4　研究発表
　A班　「湖西市郷土の偉人 遠州国学者 夏目甕麿
　　～師弟との繋がり＆偉業を探る～」
　B班　「湖西市に残る白秋の足跡とその伝承」
5　指導講評　専任講師　鈴木芳朗　先生
6　閉　　会

（B班）

（A班）

「湖西市郷土の偉人 遠州国学者 夏目甕麿」
～師弟との繋がり＆偉業を探る～

A班

はじめに

「夏目甕麿」は白須賀宿の国学者であり歌人です。湖西市の副読本「私たちの湖西」や「広辞苑」等にも掲載されています。

湖西市の偉人、発明王の「豊田佐吉翁」はよく知られていますが、「夏目甕麿翁」については詳細はあまり良く分からず、多くの人に知ってもらおうと研究テーマにしました。

夏目甕麿

夏目甕麿の生い立ちと生涯

夏目家の先祖は雲谷村（現在の豊橋市）で白須賀宿へ移り住みました。

雲谷の普門寺には「甕麿夫妻」の墓があります。5代目から白須賀宿に移り住み、甕麿は6代目忠蔵とまさの長男として1773年5月5日誕生しました。甕麿は7代目で、酒造業（酒屋）を先代から引き継ぎ営みました。

普門寺本堂には甕麿が、遠州の地へ全国から歌人を呼び「全国歌会」を開き、そのとき読まれた和歌が額に刻まれ、奉納したものがあります。この中には、出雲大社の千家氏や森町の小国神社の小国氏の名前も見られます。

この頃の甕麿は、全国津々浦々に人脈を持ち、歌人たちを遠州地域へ呼び寄せることが出来る顔と財があったのです。

普門寺の墓

夏目家は、新居宿の高須家と牧野家と深い関係

祖母（おかつ）は高須家から嫁ぎ、甕麿は牧野家の娘（すえ）と結婚しています。高須、牧野両家とも大変裕福な家柄で、甕麿が経済的に苦しい時には相当の援助があったと思われます。高須家6代目、8代目も国学者でありました。

当時の白須賀宿

白須賀宿は東海道の32番目の宿場で、天領でもあり、大変栄え、人の往来も多く文化や色々な情報も入ってきました。夏目家は名主として宿場をまとめていました。

甕麿が子どもの頃、岩手の城主であった長坂氏が、白須賀の権現山に移り住み、白須賀の宿場の住人として、ふさわしい教養を身に付けさせるため「忠義と孝行」「文武両道」「武術」を学ばせようと笠子学園を開きました。

夏目甕麿の勉学精神及び国学への目覚めと晩年

甕麿も笠子学園で学び「武術」は得意では無かったようですが、後には指導者として後進の指導を行いました。幼少の頃より才能に秀でていて、高級武士が酒代の代わりに置いて行った写本の「古今和歌集」に出会ったことで、国学に目覚めたと言われています。国学は、日本古来の生き方や考え方、見方を探り、良き文化や生活スタイルを継承しようと生まれました。江戸時代中期頃より盛んになり、特に遠州地域は〝地の利に恵まれ〟遠州国学者と言われるほど、多くの国学者が輩出され、活躍しました。

甕麿は国学者以外の学友や、西洋文化を学んだ「平賀源内」「国友一貫斎」「伊能忠敬」などとも親交がありました。

１８１０年頃、甕麿（38歳）は西洋知識を吸収して、「エレキテル（摩擦起電器）」「望遠鏡」「顕微鏡」などを購入し、自分の手で組み立て研究しました。１８１５年、甕麿（43歳）が家業を退いた後、研究や憩いの場所として学問所「萩園」を自宅敷地内に開設します。当時としては珍しい木造3階建てでした。１８２１年、甕麿（49歳）の時、残念ながら「萩園」が火災で、焼失してしまいました。

この1年後、甕麿は旅先の摂津の国・昆陽（こや／現在、兵庫県伊丹市）で誕生日の5月5日に50歳の生涯を閉じました。

師の偉業と甕麿の関係

国学が盛んになった当時の時代背景

江戸時代中期で、甕麿が影響を受けた国学の師と、子どもの加納諸平らの誕生から亡くなるまでの世の中は、5代将軍　綱吉から、11代将軍　家斉の時代です。

世の中は、綱吉の時代「生類憐みの令」が発令され、庶民にとって蚊も殺してはいけない等と囁かれ、暮らしにくい世の中でした。あちらこちらで一揆が起こり、火山の噴火や地震もあり、天変地異もありました。

賀茂真淵の生涯及び国学と甕麿の関係

賀茂真淵

甕麿が生まれた時には、真淵は既に亡くなっていて、直接面識はありません。真淵は多くの弟子を育て、今でも国学研究者たちは真淵を〝天才的国学者〟と評しています。その真淵の考え方や教えを、内山真龍を通し、甕麿は指導を受け、生涯にわたり崇拝し続けました。

真淵は浜松の神官の子として誕生し、京都で多くの国学者に学びました。偉業の1つに、以前は書き写す方法しかなかった写本を、版木で何枚も印刷できる版本の技術により、庶民層に国学文化を広げた功績は偉大です。

内山真龍の生涯と甕麿の関係

内山真龍

甕麿の国学精神を芽生えさせた第1人者で、真淵の教えを忠実に且つ頑なに継承しました。甕麿はじめ13人もの国学者である門弟を育てています。甕麿とはすこぶる良き師弟関係であり、白須賀宿や学問所「萩園」に真龍は、20回ほど訪れています。

真龍は天竜大谷村名主の長男として誕生し、俳句や絵画を嗜み、号を「雲里」と表記しました。日記を記し、甕麿が良き師弟関係にあったことが、その日記から読み取れます。一部ですが、

『１７９７年8月28日　白須賀　夏目小八来る。（小八は甕麿のことです）30日　白須賀　夏目氏　酒屋小八　登山に向かう。』などと記されていて、この訪問がきっかけで甕麿は真龍の門弟になりました。

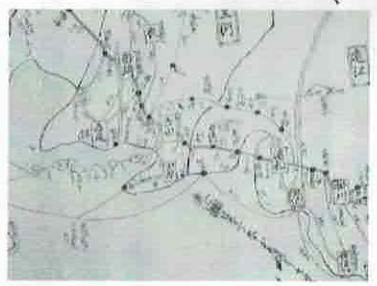
本居宣長の生涯と甕麿の関係

本居宣長

宣長は伊勢の木綿商「小津屋」の長男として誕生しました。15歳で家業を継ぐための修業を江戸に出て行うが、商売に興味が無く商人としては不向きとの烙印を押され、1年で松坂へ返されました。

自宅へ戻ってから1年、家にこもり畳2畳ほどの日本地図「大日本天下四海画図」を17歳で描き上げました。詳細に書かれ、地名も3千１００余りが記されています。その後、京都で医学を勉強し、29歳の時、松坂で町医者本居春庵として活躍しました。昼間は医者、夜は国学の勉強を続けました。

賀茂真淵の書いた「冠辞考」を見て、門人になりたい気持ちが強まり、宣長34歳の時、伊勢参りに来た真淵に会うことが叶い門弟となります。その出会いが、



日本地図

有名な「松坂の一夜」と言われています。その後、真淵の教えを頂き1年後に「古事記伝」を書き始め、35年後に全44巻を完成させました。

宣長は、見たもの、聞いたもの全てが頭に記憶され「学問の機械」と言われ、現代のコンピュータのような頭脳の持ち主でした。几帳面な宣長は、誕生から死後のことまで全てを日記に記しました。門人も多く、直接の門人は４８９人も居て、その中に夏目甕麿や加納諸平も居ました。

国学者たちの系統と師弟の関係及び甕麿の盟友たち

「古事記」「日本書紀」「万葉集」などを教材として、研究をしました。国学は、荷田豊満、賀茂真淵などを経て、夏目甕麿も研究しました。賀茂真淵、内山真龍、本居宣長たちの時代は、縦の師弟関係が厳しい時代でしたが、夏目甕麿の時代は、横の関係が尊重されました。

甕麿の盟友には新居宿の高須元尚をはじめ、多くの盟友に恵まれ、中でも石川依平は、甕麿の3男を養子にするほど親しくしていました。子どもの加納諸平も門弟の1人でした。

夏目甕麿と盟友たちの偉業

甕麿の号は「萩園」で、自宅の学問所も「萩園」

学問所周辺には萩の花が咲き乱れ、歌集「万葉集」でも萩を詠んだ研究を好んで行いました。甕麿は資料が極端に少なく、恐らく学問所「萩園」の火災で、殆どが消失したと推察されます。

甕麿の国学研究の観点は、内山真龍と本居宣長から指導を受け、

その教えや考え方を基礎にして国学の発展に努力しました。内山真龍と本居宣長に師事した背景は、賀茂真淵が自分の門弟門下に、本居宣長の師事を受ける様促したためです。だだ、晩年の内山真龍は、本居宣長との意見や考え方に相違を感じ、余り親交を深めることをしなかったようです。

師である内山真龍の偉業と甕麿の関係

真龍は、国学以外にも豊富な知識を習得し、趣味も多彩でした。真龍の記した「日本紀聚解」を、清書して天皇に献上することを甕麿が勧めました。それを、知り合いを通し、光格天皇に献上したことから内山真龍の名声が一挙に高まりました。

真龍は甕麿への信頼を一層強め、深い親交にあったことが真龍の日記に記されています。真龍が多彩の趣味を嗜み、模写画や俳諧を楽しみ、捺印した印章は甕麿が贈呈したものです。その印章は、三ヶ日の魔訶耶寺に居た僧　五來に彫らせた〝龍〟で、真龍は生涯に使用し続けました。

師である本居宣長の偉業と甕麿の関係

宣長は、師の説も論理的実証の無いものは批判し、自分の考えを貫いたと言われています。賀茂真淵から教えられた、庶民の教養向上を常に考えて、門弟門下たちにもそのことを力説しました。

宣長の京都遊学（公家たちへの講義招へい）には、甕麿の盟友5人が同行しました。この時の旅の日記が「鈴屋大人都日記」です。本居親子は紀州藩指導役であったが、養子の大平が指導できなくなり、夏目甕麿と子の加納諸平が代役を務め継承しました。

甕麿自身の偉業

①著作物は11作

・「古野之若菜」「万葉集遠江歌考付録」などです。

②出版本は4作品

・「鈴屋大人都日記」「万葉集遠江歌考」「篠塚文集」「万葉集一句　類語抄」です。

③版本の出版事業

甕麿は、賀茂真淵や本居宣長の教えであった、庶民の教養向上には、版本の普及であることを忠実に守り、私財を投げ出し出版を行いました。版本の出版事業は当時、莫大な資金を必要としました。版下師、貼り師、彫り師、摺師、製本綴じ師など多くの職人の手と時間をかけ1冊の本が出来上がりました。この職人たちの家族も含め、白須賀宿で生活をさせての作業でした。

当時、版本でつくられた「浮世絵」や「風景画」は、字の読めない庶民にも目で美しく、買い求められたが、版本は字の読めない庶民には感心が無く買い求められなく商売にならなかったようです。

④版本の登場は日本人の識字率向上をもたらした

版本が出回り、庶民も寺子屋などで手習いが出来るようになり、江戸時代中期以降には、日本人の識字率は50％（男性は70％）を越し、世界では考えられない高い識字率でした。

数字の単位や計算も1670年、吉田光由が和算の入門書「塵劫記」を書き、庶民に広めたことで、日本人の算術も世界一でした。

版木職人

摺師

製本職人

この様に版木の製本が〝読み書きそろばん〟の文化を創出した意味では、版本の普及は大変大きな偉業であります。

⑤親子で「皇陵図」を作成

甕麿は子どもの諸平と一緒に、第1代　神武天皇から、第102代　後花園天皇までの、76枚の「皇陵図」を作成しました。皇陵図は正確性の高い、美しいものです。ただ、何故作成したのか、何時どの様にして調査したのか、何故公表しなかったのかなど、残念ながら分かっていません。

⑥日本語と五十音の関係及び整理と確立

日本語はどこから来たのか、まだ良く分かっていません。平安時代初め、経本の文言から「いろは　歌」として47文字が生まれ、「ひらがな」「カタカナ」が作られたと言われています。

奈良時代にかかれた「古事記」は、はなし言葉を単に漢字をあて字として記されました。やまとことばを万葉仮名で「麻佐礼留多可良」と記しています。漢字の意味は一切なく、国学者たちの解読の結果、「まされるたから」（勝れる宝）と書かれていることが分かりました。

その後、空海が中国から帰国し、中国語の漢字を簡素化して、日本語をつくったと言う説もあります。1つのものを見て日本で「ヤマ」と発音するものと、中国で「サン」と発音するものが同じであることから、中国の漢字をあてはめ日本語が作られました。

最初の五十音は、契沖が考えたと言われています。ひらがなやカタカナは漢字を簡素化したものですが、基になる漢字はそれぞれ異なります。

この様な日本語を発展させ「語意考」として本居宣長が表しましたが、甕麿ら遠州国学者たちが整理して体系立てたのが「五十聯音図（いつらのこえず）」で、先ず母音に意味を持たせ、清濁二音、清音、半濁音が組み合わされ、現在の五十音が作られたのです。

⑦紀州藩　徳川御三家の指導役を務める

本居宣長、大平親子から受け継ぎ、夏目甕麿と長男の加納諸平が指導役を務めました。加納諸平は紀州藩の藩医も務めながら、国学所総裁まで上り詰めました。

各記念館、史料館学芸員の評とまとめ

各館長や学芸員は、〝一句同音〟に夏目甕麿を考察した評価を「真面目で、お人好し」「人のため社会のため、後世に貢献することを考えた」人物像と捉えられています。

師や盟友たちの功績も、甕麿の出版や勧告が無ければ、今の世に伝わったかどうか分からず評価も定かではないとも言われています。

甕麿は極度の〝酒好き〟が仇になり、早死にしましたが、長生きしておればもっと多くの功績を残すことが出来たと推察されました。

内山真龍資料館にて

■ご指導・ご協力くださった方

■参考文献
「遠江の国学者夏目甕麿」甕麿顕彰会会長　夏目常磐
「ふるさとの国学　賀茂真淵と夏目甕麿」賀茂真淵記念館
鈴木理市
「鈴屋大人都日記」石塚龍麿　録　夏目甕麿　出版
湖西文化研究協議会
「広陵図」夏目甕麿筆　湖西文化研究協議会
「国学者　夏目甕麿と加納諸平」平石基次
「小学ベスト教科辞典」国語・社会　学研
「国学者　夏目甕麿の研究　特にその国書開版について」
夏目忠男
「湖西風土記大庫」湖西市史編さん委員会
「わたしたちの湖西」湖西市
「江戸時代新聞」砥鹿神社　大石学　小学館
その他、各資料館及び記念館展示資料の閲覧　賀茂真淵記念館、内山真龍資料館、本居宣長記念館、新居関所史料館

湖西市に残る白秋の足跡とその伝承

B班

はじめに

歌人として高名な北原白秋は、郷土出身ではありませんが、郷土に大きな文化的影響を与えた人です。なぜその人が湖西市に足跡を残したか、興味を持ちましたので調べてみました。

白秋について

白秋はよく知られている、からたちの花、ゆりかご、ペチカ、この道等、数多くの童謡の作詞者です。

又、ちゃきり節、松島音頭などの新民謡、駒澤大学校歌、岡崎市の市歌など、市歌や校歌も数多く残しています。

この様に白秋は多くの詩集、歌集、童謡集、随筆、小説、評論と多彩な作品を生み、世に送り出しています。

昭和８年ごろ　自宅書斎での白秋

写真は昭和8年、その頃住んでいた砧村大蔵、現在の東京都世田谷区にあった自宅の書斎での白秋です。

北原白秋　湖西来訪のきっかけ

当時の富士紡績鷲津工場二代目工場長と人事課長の河内さん、河井家旅館女将の絶大なる力添えにより鷲津の民謡が生まれる事になりました。

河内課長の友人に岐阜の「雀のお宿」のご主人野田素峯氏という詩人がおりました。

当時鷲津も富士紡績という大きな工場も出来、東西の交流も盛んになってきました。川内課長と野田氏が河井家旅館を訪れ「全国的な民謡ブームでもあり、浜名湖遊覧のお客で賑わいがあるし、接客業者の間からの大きな要望もあるから、この地にも民謡が出来ないものか」と云う話で盛り上がったのでした。

今で言うご当地ソングが欲しいとの気運が高まりました。

素峯氏から、私の師匠で有名な先生が、作詞のお仕事をしているから承諾があれば「鷲津には過ぎたる民謡が出来ますよ」と提案が有りました。

その先生こそが北原白秋だったのです。

こうして、富士紡績―河内課長―野田素峯―北原白秋―鷲津民謡誕生、という幸運な縁が結ばれたのでした。

白秋　湖西での創作活動

何度も鎌倉の白秋邸へ鷲津訪問を依頼しに行き、昭和7年10月13日に実現しました。

日程は10月13日、14日鷲津泊、次に10月22日から27日鷲津泊でした。

又、翌昭和8年1月4日歌集整理の為舘山寺、鷲津へ9回目の来訪が有りました。その時は風邪の為19日間滞在し原稿の整理をしていました。

浜名湖巡りをしたいとのことで野田氏、河内課長、河井家旅館主人達が同行し物知りで、話上手な巡航船の船長の説明で新所、入出、三ヶ日、佐久米、細江、舘山寺、弁天島を巡りました。

又当時では贅沢なタクシーで白須賀、汐見坂、新居関所も見学しました。

宿に着き好きなお酒を楽しんだ後は明け方迄原稿作りに没頭したとのことでした。

御子息の隆太郎氏によると「湖西ほど父の書が残っている地は知らない」と言われてます。

河井屋旅館

河井屋旅館は横須賀川の河口にあり、旅館からは舘山寺の大草山と遠く遥かに富士山を望み横には汽船場が有りました。

建物は横に長く、純和風の二階建て、玄関の屋根には旅館と焼かれた鬼瓦が乗っていて、とても風流に建てられていました。白秋はこの旅館を「観潮楼」と名付けました。

白秋の部屋は二階で海に面しており、部屋からは浜名湖が一面に広がり角目網をする勇ましい漁師の姿、網の様子、飛び交うボラの様子などが手に取るように見られたことでしょう。

鷲津節歌詞創作エピソード

鷲津節の一番で、「水は浜名湖　浜名は鷲津　いまあ夜明けのトントン初囲目　スズキ　は　すまだしぶすは飛ぶ　ジャンジャンおいでよ賞の上を　ハラハラ　ヨウイヤサ」と有ります。

皆さん囲目網を見たことが有りますか。囲目とは、一張の長さ約430m、巾220mの大網で、魚をあつけると二艘の大船で取り囲み、飛び出すボートを大網の外に張った賞網に受け取る獲る網漁です。

その賞網は、竹を1・8m位に切り揃えて15m間隔に並べ、麻縄を5本渡して編み、その上に綿糸の網をたっぷりのせて所々で竹賞の縦糸に結びつけます。

ボラが立ちに飛び込むとその重みで袋状となり、夕そに入った状態でボラが収まるのです。また、スズキは飛び出す習性がなかったので「ヒシ」と呼ぶモリで獲りました。大正七年頃から「スキ袋」が使用され、ボラと同じ様にスズキも大量に獲れるようになりました。

入出囲目網組合では13張を7張と6張の船団に分け、浜名湖を南組と北組に分けて交互に漁をしました。浜名湖に大船団が来ると、三ケ日や細江の漁師たちは「まるで海賊がおしよせて来る様だった」と言っていたそうです。

この囲目網漁の人気も上がり、昭和五年には「天竜囲目網漁」も行われて天皇陛下が漁をご覧になりました。また観光船も沢山見学に来て、その船の中まで勢い余ったボートが飛び込んだそうです。

友人から聞いた話ですが、この当時はモクを肥料にしたので、けていたのでした。

昭和8年8月12日、東京銀座の三越百貨店の6階ホールで行われた、全国民謡大会に鷲津節が出場となりました。真夏の暑い中、冷房のない三等列車で東京まで行き、到着後すぐに踊りの練習・練習の連続で、本番が終わった時はみんなが汗びっしょりでした。

写真は昭和8年7月19日に撮影されたものです。河井家旅館横の空き地で本番まで踊り、朝から浴衣に着替えて、髪を結い、衣装を付けてリハーサルした時の模様です。

大会には当時の鷲津の絣麗どころ5人が出演し、ゆかたの裾をまくり上げ、赤い御腰をひざ上までのぜりふで、本来は水の中で踊る「水上踊り」としての「鷲津節」の活発な踊りに観客を沸かせました。

大会は勝ち抜き2日戦で、最終の優勝戦まで残り「鷲津節」と「佐渡おけさ」との決戦となり、最後まで勝敗はつかず両者優勝となり、「鷲津節」は全国制覇を成し遂げました。

この時の白秋先生の力の入れようは大変なものだったと言われています。

東京からの帰りは、汽きとは大違い。凱旋将軍のごとく二等車に乗って意気揚々と帰ってきました。その後、佐渡おけさ、は日本を代表する民謡となりましたが、鷲津節はなぜか50年間眠り続けていたのでした。

白秋は夜十時になるとほどの人量の鴨の鳴き声や、鴨の羽ばたきまなども聞こえたのではないでしょうか。又すぐ横の汽船場で乗降する観光客や商用の人達の行きかう様も一望できました。

現在の建物は昭和十九年の地震、その後の台風、感慨深いものがあります。

白秋が訪れた同じ場所に訪ねることが出来、感慨ひとしおでした。

河井屋旅館
女将みちさん

女将　みちさん

河井屋旅館で中心になっておもってなしをした女将みちさんのお話しをします。

白秋は「女国定　浜名の女将　潮の満ち干も　ひろびろと」と歌われております。鷲津節生みの親と言われているみちさんは、鷲津に良い民謡を残す為なら身代限りをしても良いと言う意気込みで白秋をもてなしました。

みちさんは風呂好きの白秋の為に二階に お風呂を作りました。白秋はその お風呂を「睡蓮狂」と名付け、お風呂を楽しんだと言われています。また、鷲津に来た二回の曽用、朝から お酒を飲むと白秋をもてなすのはとても大変で、白秋には女中 二、三人を付け、みちさんもでまきる限りの お相手をするよう心掛けました。

色々な人達が色紙を びを頼もうと来ても白秋は一切応じず、みさんが、白秋のご機嫌の良い時に書いてもらいました。

昭和天皇天覧角目網御乗船の様子

「真砂丸」昭和天皇ご乗船

日常使っている言葉です。白秋が滞在していた河井屋旅館でお風呂に行く途中に、宴席の大学生が大声でジャンジャンと言っていた言葉を耳にして、聞き慣れない言葉に興味を持ち、すぐに自分の部屋に戻って見事に歌詞の中に取り入れて完成させたと伝えられています。

浜名湖セレナーデの歌詞創作エピソード

浜名湖セレナーデの九番の歌詞に「たとえ沈もうと　いとしの鐘よ見せておくれよ　湖の底　湖の底」とあります。

この1詞だけはどこの場所か特定ができません。民謡保存会会長の言によりますと、湖西市編さんの「湖西風土記文庫（語り継ぐ）」の中に湖底の鐘という伝説があり、それを歌にしたのでしょうとのことです。

その内容は永禄11年（1568年）、徳川家康の武将酒井忠次農家ではモクを取る舟を持っていて、元気過ぎて網から飛び出るボラをとらせてもらい、ボラみそや刺身で食べた記憶があるそうです。

この囲目網漁も昭和二十六年頃終焉を迎えました。今年十月十七日、十八日に開催された入出の文化祭で囲目網漁の展示と説明があり、グループで行ってきました。

又この辺の方言は色々有りますが、ジャンジャンと言う言葉は、私達が今川側の宇津山城（入出　正太寺の裏山）を攻略するにあたり、川尻（市役所の西側近辺）の妙立寺の梵鐘をはずして陣鐘にして、古見（市役所の南側近辺）の松崎から船に積んで打ち鳴らしながら浜名湖上を進軍していきました。

ちょうど新所の徳泉寺あたりに来た時、誤って梵鐘を浜名湖に落としてしまいました。戦いが終わったあとで、漁師が網を曳いて探しましたがついに発見することができませんでした。

梵鐘は今でも湖底に沈んでいて、天気の良い静かな日には湖底に見えると言い伝えられています。と言うような説明を白秋は浜名湖を巡航した折、案内役の船長から受けていたのではと話されていました。ここでは歴史的ロマンを感じます。

白秋と本興寺

昭和7年10月13日鷲津に来ました。宿泊先の河井家旅館の主人から本興寺の話を聞き、着いたその日の夕刻に訪れております。その後も閑静なたたずまいが気に入り庭園の絶景にも心打たれ何度も訪れました。

白秋が当地で詠まれた四十九首の短歌と六節からなる詩「白須賀」は歌集「夢殿」に浜名の鴨として発表され、白秋全集にも収められております短歌四十九首のうち三十三首は本興寺を詠んだものです。白秋自筆のノートより

「水の音　まさにひびけり　聴きていて　夕かげ近き　冬のこの林泉」

「土の橋　かかり低きに　糸檜葉の　ほそぼそと垂れて　みゆきありける」

枯山水の風格をも兼ね備えたお庭の土橋を詠んだ短歌です。

本興寺にある白秋使用の机は元河井家旅館に白秋使用の机が保存されていましたが、湖西市に寄贈され市から本興寺に与託され書院に置いてあります。撮影は禁止です。

また、中の間には歌碑に刻まれている白秋自筆の短歌の短冊と**「このごとき　しずけき林泉の日あたりは　ただにながめて　坐りてぞあらん」**の色紙が掲げてあります。

白秋と本興寺のことを少しでも知りたいと思い、住職にお会いすることができました。その折に大切にしておられるお宝を見せていただきました。

「新作民謡五十二章」白秋自筆の原稿用紙を製本したもので、20メートル位はあるでしょう。

この中には鷲津節や浜名湖セレナーデの1番、2番、6番などがあり、草書体の見事な筆跡です。白秋手書きの、定宿おかみの「みち」さんの24、25才頃の似顔絵や奥様に送ったハガキの原文なども見せて頂きました。

「短歌の感興つづきたるため新持論の方生まれず、今はこちらの待たずに　締め切るよう吉田君に伝えられたく　白秋」

原稿の締め切りに間に合わないことが記されております。

昭和53年10月16日、歌碑建立の除幕式が盛大に行われました。

白秋が湖西にきてから45周年の記念行事として白秋御子息ご一家、文化協会関係者、市民多数の方々が参列しました。

本興寺境内本堂登り口右側杉下にあります。

「水の音　ただにひとつぞきこえける　そのほかはなにも　申すことなし」と刻んであります。

本興寺を初めて訪れた時に日澹上人からさし出された画帳に、即席で書かれたその流麗な筆跡を拡大して歌碑に刻みました。

建立に到るまでには数多くの方々のご支援が加わり建立されました。

以後今日まで北原白秋歌碑顕彰祭は、文化協会、本興寺、湖西民謡保存会の皆様で、毎年盛大に行われます。今年は38回目に当たり、10月12日に行われました。

客殿において住職のお話、一般中高生から募集した記念短歌、俳句作品の入賞発表、民謡保存会の皆様による鷲津節等の奉納が行われました。

民謡保存会の創設

歌碑建立に伴い、鷲津民謡の保存会を創るべきとの声が上がりました。

昭和56年10月6日、田中弘さんが初代会長となり、会員142

白秋自筆の原稿用紙

名で盛大に設立総会が行なわれました。

昭和57年1月9日、湖西市制10周年記念事業として「ＮＨＫあなたの町から30分」で鷲津節を披露したところ　好評を得てテレビ、ラジオ、新聞各社から取材攻勢に合い一気に広まりました。

昭和60年12月23日にＳＢＳテレビの取材を汽船場で受け、「静岡県の三大民謡」の一つとして放映されました。その後も静岡、名古屋等のステージに出演依頼が来て活発に活動をしていました。

現在は子供会員も8名入り34名で正調の唄、踊り、お囃子を伝承すべく練習し、花祭り、おいでん祭等で活動しています。

白秋のこの名作をもっと湖西市民に知って頂き、故郷の宝物、財産として、今守っていかなければならない大切な事だとの思いで活動されています。

研究のまとめ

今回北原白秋に関して調査した結果、当時（昭和初期）の湖西の人達が地元を盛り上げようと全国的に有名な北原白秋を招くのに大変努力されたことが分かりました。

白秋は鷲津だけでなく、浜名湖周辺にすばらしい文化の影響を残してくれました。その足跡を末永く市民に伝えて行きたいものです。

昭和 60 年・取材風景

■参考文献

湖西風土記文庫

白秋と湖西（湖西市文化協会）

白秋顕彰祭記念誌（湖西市文化協会）

目で見る湖西、引佐、浜名の百年（郷土出版社）

白秋の水脈（北原東代）

白秋への小径（北原東代）

夢殿（文芸湖西№38、48号）

静岡県文化財調査報告書　第30集（県教育委員会編）